



👁️👁️ みどころ

『アンナと過ごした4日間』(08年)に続いて、イエジー・スコリモフスキ監督の金熊賞受賞作品を鑑賞。1960年代後半のヌーヴェルヴァーグ作品らしく、レーサーを目指す主人公マルクの生きざまは無軌道で危なっかしい。恋人のミシェルもポーシェの盗みに加担するなど、一步誤れば2人の人生は台無しに。しかし、そんなスレスレのところから青春の瑞々しさが輝くから不思議。時代を越えたきらめきを今、あらためて実感！

* * * * *

続けてイエジー・スコリモフスキ監督作品を

『アンナと過ごした4日間』(08年)が日本で公開されることに伴い、私はエイベックスからそのDVDを借りて、イエジー・スコリモフスキ監督作品をはじめて鑑賞。その時一緒に貸してくれたのが『出発』(67年)だったため、これも続けて鑑賞。

これは1967年のベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した作品で、ポーランド国内での創作が無理だと判断したイエジー・スコリモフスキ監督がベルギーで作った映画とのこと。予備知識がほとんどないまま観たが、1967(昭和42)年は私が大阪大学に入学した年であると共に、1960年代後半は世界が激動した時代。そんな時代に当時29歳のイエジー・スコリモフスキ監督が作った本作は、主人公マルク(ジャン＝ピエール・レオー)とその恋人ミシェル(カトリーヌ＝イザベル・デュポール)との何とも瑞々しい青春を描いた傑作だ。

マルクはポーシェ命!の若者

ブリュッセルの美容院で働いているイケメン青年マルクは、ポルシェ命!の若者。つまり、ポルシェに乗ったレーサーとしてデビューを飾ることを夢みて、日々レーサー顔向けの運転テクニックを勉強している若者だが、そんな若者がなぜポルシェに？

映画の冒頭、友人（ポール・ローラン）と共にマルクがポルシェを乗り回している姿が登場するが、実はその車は店主（レオン・ドニー）の物。つまり、マルクらは夜中にこっそり店主の車を無断で乗り回しているわけだ。もちろん車に詳しいマルクは、走行距離計を元に戻すことなど朝飯前。

そんなマルクはそのポルシェで今週末のカーレースへの出場を勝手に登録していたが、あいにく今週末は店主がポルシェを使うことになったらしい。こりゃヤバい! 困った状況に陥ったが、それを切り抜ける力は若さしかない。19歳（らしい）マルクは、そんな苦境の中、あの手この手、一体どんな手を？

違法スレスレ?それとも、立派な犯罪?

冒頭、いかにも青春映画っぽい歌詞の女性の歌う声が登場すると共に、ポルシェが疾走するシーンでは印象的なバック音楽が流れてくる。何の予備知識もなければ俳優の名前も顔もわからないから、ターバンを巻いたどこかの国の王族とその秘書が車を選んでいるシーンが出てきても、これが一体何を意味するのかよく理解できない。

しかし、続けて観ていると、これはマルクが友人のマハラジャ（ヨン・ドブリニーネ）と仕組んだ芝居であることがわかってくる。こりゃ違法スレスレ?それとも立派な犯罪? ホントにマルクがこのポルシェで今週末のレースに出場すれば明らかな窃盗罪だが、改心したマハラジャが言うように、すぐに展示場に車を返せば違法スレスレ?

なぜミシェルはマルクと一緒に行動を?

美容師見習いの仕事には、客の髪を洗ったりする他、注文を受けたカツラを自宅に届ける仕事もあるらしい。したがって、どこかの国の王族に化けて展示場のポルシェを乗り回している間にも、その配達の仕事はきっちりと。ここらあたりが、悪ぶってはいてもマルクはまだまた純情で真面目な若者? また、そんな仕事の中で美女ミシェルと出会えたから、マルクはラッキー。

イエジー・スコリモフスキ監督が本作で描く青春劇はマルクのレーサーへの夢がメインだから、マルクとミシエルの恋愛模様の展開は意外にスロー。別の言い方をすれば、途中からどうもミシェルはそれを望んでいるようだが、恋の道にはまだ子供の(?)マルクはポルシェのこと、レースのことしか頭がないから、その方面の進展が埒(ない)わけだ。閉店した展示場を飾っている車のトランクの中での語り合い、お金を得るため大きな鏡などを道具屋に売り払うシーンでの楽しそうな語り合いなど、29歳のイエジー・スコリモフスキ監督は、貧乏ながらもいかに楽しげな、そしていかにも粋からはみ出しそうで危な

っかしい2人の青春模様を等身大の目線で追っていく。これが、「ポーランドのゴダール」の異名をとり、本作が金熊賞を受賞した由縁だろう。

今から42年前のブリュッセルの若者たちの、危なっかしくも拍手したくなるような生きざまをしっかりと味わいたい。

有閑マダムのお誘惑は？

ポルシェを乗り回されている店主はいわば従業員のマルクから手を嘯まれているわけだが、イケメンの若者を店に置いておくとは有閑マダムの受けがいいから、その面ではお店にもメリットがあるようだ。逆にポルシェを持つ有閑マダム（ジャクリーヌ・ビル）にはマルクも興味津々で、何とか彼女のポルシェを借りようと策をめぐらしていた。そんなある日、プールのある会場で開かれた水着ショーで偶然(?)マルクとマダムが出会い、思わぬ展開になっていくことに。

マダムの狙いは何となくミエミエだが、さてマルクはそれに乗っていき、その見返りとしてマダムのポルシェに乗ることができるのだろうか？こんなシチュエーションにおいてもマルクは意外な潔癖性(?)と誠実さ(?)を示すから、それに注目！

ホテルのシーンから一気にラストへ

万策が尽きかけた時のマルクのログセはいつも、「ポルシェを盗むぞ！」。マルクが持っているのは安モノのバイクのみ。したがってポルシェがない時のミシェルとのデートの足はいつもこれだ。マルクからのアプローチに当初用心していたミシェルも、マルクのあっけらかんとした開放的な性分が見えてくると次第に打ち解けていったのは当然。しかし、レースの日は刻一刻と近づいてくる。焦燥感を深めたマルクはミシェルと共に遂にログセの「ポルシェを盗むぞ！」を実行に移したが、さてその行きつく先は？

60年代後半のいわゆるヌーヴェルヴァーグ作品では若者の無軌道ぶりが描かれるが、本作における2人もまさにそれ。しかし、車を盗んで2人で逃走した挙げ句に拳銃をぶっ放してお陀仏、では別のテイストの映画になってしまう。本作はあくまでマルクのレース出場ができるかどうかのポイントだ。夜も更け、疲れ切った2人は安宿に泊まることになるのだが、このホテル内でのシークエンスが私には極めて興味深い。こんな密室になれば覚悟を決めた(?)女の方が積極的になるものだが、本作においてもそれは同じ。ところがそれに対するマルクの行動は？ベッドで眠るミシェルの側に入って行かず、一人床の上にトランクを枕にしてマルクが眠るのはなぜ？そして、彼の頭の中では明日のレースに向けてどんな対策を？

そんなホテルのシーンから一気にラストに入っていくのだが、さてイエジー・スコリモフスキ監督が描く本作のラストとは？

2009(平成21)年9月12日記